トゥルネンのアメリカ化と啓蒙された身体： 糸川麻里生氏の所論をめぐって

山本 徳郎

Amerikanisierung des Turnens und der aufgeklärten Menschenkörper: Kommentar zur M. KumeKawa's Denkweise

Tokuro Yamamoto

キーワード：48年の人々，マルチチュード，規律社会，管理社会

本稿は，日本独文学会機関誌「Neue Beiträge zur Germanistik (ドイツ文学)」(MünchenのIudicum Verlag社刊)の第3巻第3号(2004年)，175—186頁に掲載されたMario KUMEKAWA, Das Schicksal des aufgeklärten Menschenkörpers. Der deutschamerikanische Turner: Zwischen Bürgerkrieg und Weltkrieg. (糸川麻里生，啓蒙された人間身体の運命：アメリカのドイツ人トゥルナー—南北戦争と世界大戦の間—)を論評したものである。

著者はドイツ文学を専門とする慶応大学文学部助教授であるが，一時ボクシング雑誌の編集にたずさわり，2002年には『サッカーのエスノグラフィ—へ』(市之瀬敦との共編著，社会評論社)を出版しているように，スポーツに関心を持っている。2002年の日韓共催サッカー・ワールドカップ開会直前に，ソウルで行われたサッカー史に関する国際シンポジウム“Querpass”(韓国ゲーテ協会主催)に，論評者とともに招待された。

論文の主題は，文明化(啓蒙)された人間身体の運命を問うことである。具体的には三月革命期(1848/49年)にアメリカに亡命したドイツ人ト

ウルナー(「48年の人々」と言われる)が徐々にアメリカ化したというスポーツ史的事実を思想的に検討している。トゥルネンは19世紀初めにドイツで組織されたもので，単なる身体運動ではなく，人間解放をも目論んだ啓蒙的で愛国的な文化運動であった。当時の人間の身体はカントにも見られたように，不気味なもの，克服されねばならないものと考えられていたので，トゥルネンは人間の身体に一定の規律を付与することに貢献していた。

アメリカに渡った当初「48年の人々」はドイツの伝統を保持し，ドイツ人として振舞っていたが，南北戦争時代や世紀の変わり目，そして第一次世界大戦と時代が進むにつれて徐々にアメリカ化していった。この事実を用いながら，フーコーの「規律社会」から「管理社会」へという構想を基軸に，ケーニヒの『身体—知—力』や，近年注目されているハートとネグリの『〈帝国〉』の方法を用いながら啓蒙された人間身体の運命を考えている。結論的には，ホルクハイマーとアドルノのように，啓蒙されることによって死体化したと考えられた「人間」を，「マルチチュード」の概念を用いながら，何とかよみがえらせようと，その可能性を探っている。

18世紀から19世紀における「啓蒙」には，ま

だその野蛮な側面は知られていなかったが、ナチズムを体験する20世紀中葉になると『啓蒙の弁証法』の著者たちであるホルクハイマーとアドルノは、啓蒙された人間身体を大変悲観的に見ていた。彼らは、啓蒙の自己破滅からの逃げ道を見抜いてなかった。そして、啓蒙された人間においては、人間のあらゆる経験はその一回性を失い、交換可能なものになってしまう。その身体は何かのためのシンボルとしてのみ演じさせられる、と考えていた。

身体理解の変遷を歴史的に記述したフーコーは、近代における人間の身体は社会の中で、「正しく」機能しなければならない一つの機械の部分になったことを示した。彼の人間身体への見方は、啓蒙の暗い側面を認めていたこと、合理的な知の力を必然的なもの、避け難いものとして考えていたという意味において、ホルクハイマーとアドルノの見方に近かった。しかし彼らと違って、フーコーは権力を単純に否定的に見たのではなく、あらゆる諸関係に内在している創造的な能力として見ていたのである。

フーコーは規律社会から管理社会への移行を示していた。規律社会は監獄、工場、家庭、病院、大学、学校等のような規律化する一定の施設を必要としていた。それに反して管理社会では、支配のメカニズムが民主化されて現れ、だんだん強く社会の中に入り込み、市民の頭や身体に分け与えられた。そこでは、支配が内在していて、支配的な力を誰も外から見つけることはできない。そこでは、市民自身が民主的に作り出している諸権力のネットワークが支配しているのである。

民主的な管理社会に内在し、インターナショナルで普遍的な支配的権力と一緒に作用するこのネットワークを、ハートとネグリは「帝国」と名づけている。そして、全てを普遍化し具体化して支配するこの帝国の権力を中立化するために、彼等是一个の他の概念、すなわち「マルチチュード」を提案した。

三月革命のあとアメリカに亡命したトゥルナーは4000から10000人と推定されるが、彼らはアメリカにこれまでとは違った一つの身体理解を導

入した。つまり、ドイツ文化を刻印されたトゥルネンによって生み出される身体は規律化された生きた機械だ、という理解であった。彼らは主として北部で活動し、トゥルネン・クラブを設置し、さらにトゥルネンを学校に導入した。またトゥルナーは啓蒙された市民として、アメリカの政治システムの民主化を熱心に進めた。彼らは奴隷制に反対し、その廃止に荷担していた。南北戦争では1000名もの戦死者を出したほど、彼らは民主的な理念のために生命を捧げる準備ができていたのである。

第二世代が登場した世紀の変わり目以後、アメリカに生まれたドイツ系住民の多くは、ドイツ文化への直接的な関係を欠くようになった。さらに第一次世界大戦では、アメリカの中に反ドイツ的ムードが生じ、多くのドイツ系クラブが解散を余儀なくさせられた。世界戦争の間に、トゥルネンはますますアメリカ化し、1916年以降英語の雑誌“The Turner”も存在した。1938年には一つの新しい標語「トゥルナリズムはアメリカニズムである」が案出された。

トゥルネンは、アメリカに移入された当初フーコーの意味の規律訓練社会に相応しく、人間身体を科学的に規律訓練し、人間を啓蒙することに努力した。人間の身体はアメリカ南北戦争の時代に、啓蒙され民主化された自由の国においてさらに物質化され、身体は政治経済的にも軍事的にも利用され使用されるようになった。時代が進むにつれて、伝統の中に存在したドイツ性はだんだん後退し、アメリカ化がすすむが、トゥルネンのこのような歴史的プロセスは、身体に対して支配が普遍化する管理社会化と見ることができた。

今や人間とその身体は、多かれ少なかれ動物的野性や病気から解放され、しかし逆に社会から総括的に管理され、支配されている。今日高度に発達したテクノロジー、特に遺伝子工学の助けによって、この支配はもっと深く人間身体に入り込み、そこでは身体がオリジナルな根元的なものを失っているのである。

ハートとネグリによると、今日の世界は、「帝国」の民主的で内在的に作用する権力によって、

だんだん強くだんだん繊細に支配されるようになっていく。その力は、単に人間社会だけでなく人間身体をも遺伝子にいたるまで、科学と言説の力によって管理している。かつて労働者にみられた身体分割でその効果を明らかなものにした権力は、今や人間身体への支配を完璧なものにしている。帝国は全体的に支配し、あらゆる物や経験を管理するので、世界や帝国は一つの形式を共にしている。その形式において、あらゆる現象は理性的または科学的に理解することができるのである。この形式で理解され啓蒙された人間の身体は、勿論科学化された身体、規律化された身体であるが、しかしもはやそのようなもの（本来的なもの、つまり人間）としては生きていない。その立場からすると、具体的な身体は、意味を失っているのである。

そこでハートとネグリは、一つの新しい身体が、「マルチチュード」として生成され得ると主張している。マルチチュードは、必然的に世界と社会の部分として、帝国の形式それ自体を持っているが、近代への経過のなかで区分けされた身体は、帝国への抵抗として働くために、再び一つの位置関係（組み合わせ）のなかに組織化（再構成）されねばならない。つまり、個々の人間の身体ではなくて、大衆（Masse）の身体というものが作り出されねばならなかった。個々の人間身体を工業的テクノロジーや学術の目的的な支配から解放することは不可能かもしれない。しかし我々は、今なお試みることができるのは、別の啓蒙され自覚した人間と一緒に、人間の全身体を「マルチチュード」として、すなわち、集団の身体（Kollektivleib）として、再び発見することだ。

我々の美的、歴史哲学的、政治的課題は、メカニズムの部分に溶解させられた人間身体を、物化しない方法で、マルチチュードとして、すなわち

非個人として、再び組織化（再構成）することである。それによって、我々は生きた人間身体を完全なものとして誕生させることが出来るのである。この論文では、最後にこのようなハートとネグリの概念を用いながら、未来への希望を託そうとしているようにみえる。

本論文では、明確に指摘されてはいないが、奴隷解放をすすめる民主的なアメリカ社会の中で、アメリカニズムと化していくドイツ・トゥルナーの身体を、個々の人間の身体ではなく、マルチチュードとしての大衆の身体へなっていたことを暗に示していたようだ。つまり、「トゥルナリズム」は「アメリカニズム」と言われた段階で、それらを「集合的な生政治的身体」としての「マルチチュード」と考えていたと推測される。

マルチチュードとは、個が埋没している群集とか大衆とか人民とかではなく、「多数者が個別性の総体」であることと定義されている。つまり、従来では集団に埋没していた個、個性が、逆に生かされる集団とでもいえるものを意味しているようだ。戦後、全体主義に対して集団主義という概念が教育の世界でも用いられていた。個を埋没させてしまう前者にたいして、独立した個の集合体というような意味で使っていたように記憶する。「連帯を求めて孤立を恐れず」という懐かしい言葉に、「マルチチュード」へのエネルギーも存在しているのだろうか。

これまでのアメリカ・トゥルネン史では考えられなかった発想で論述されているので、著者の意図を充分読み取っていない恐れを感じるが、マルチチュード概念からスポーツ史へ接近しようとした試みを興味深く思う。

（平成18年4月4日受付）
（平成18年7月22日受理）